

SWOT 分析

強み (Strengths)

内部・ポジティブ要因

教育

BLOF理論に基づく有機農業教育や植物生理学、土づくりなど、専門性の高いカリキュラムが提供されており、受講生から高く評価されています。

就農実績

修了生の約 6 割が独立就農に至っており、その多くが丹波市内に定着して地域の担い手確保に直接貢献するという高い成果を上げています。

市立学校

丹波市が設置する公的な研修施設であることで、農地確保や住宅探し、補助金申請において行政・地域との連携がスムーズに行える信頼性があります。

受講者層

入学前に自己資金を準備するなど就農への本気度が高い層が集まっており、修了後も自律的に経営改善に取り組む主体性を備えています。

人的ネットワーク

講師、同期生、地域農家との強固な人的ネットワークが、就農時・就農後の重要な経営資源となっています。

弱み (Weaknesses)

内部・ネガティブ要因

研修期間

現行の 1 年制では栽培サイクルを 1 回しか経験できず、失敗からの学び直しや反復学習が不足しているという指摘があります。

カリキュラム

水稻や果樹などの丹波市の主要作物、および地域農業と共存するための慣行栽培の基礎知識を学ぶ機会が不足しています。

販路・経営

財務会計、税務、具体的な販路開拓、営農計画のブラッシュアップなど、「稼ぐ」ための実践的な経営教育が十分ではありません。

就農後支援

支援メニューは存在するものの、販路確保や経営相談、継続的な技術アドバイスなどの伴走型支援が体系化・可視化されておらず、修了生が不安を感じる場面があります。

入学者数

近年は定員を大きく下回る期(7期生など)があり、受講生が少なすぎることで実習作業の負担増や、学びの多様性が失われる懸念があります。

機会 (Opportunities)

外部・ポジティブ要因

政策環境

丹波市が掲げる「持続可能な農業・農村の担い手育成」という目標と合致しており、次期指定管理に向けた制度再編の好機にあります。

有機農業需要

栄養価の高いオーガニック農産物への社会的関心が高まっており、BLOF理論等の専門技術を求めるニーズは根強く存在します。

地域受入意向

地域関係者(自治会・農会等)は新規就農者の受け入れに肯定的であり、耕作放棄地解消への期待から農地提供等の協力が得られやすい環境です。

丹波市の条件

有機農業への理解が深く、「有機の里」としての高い認知度や京阪神の大消費地に近いという販売・物流面での地理的優位性など、新規就農者が定着しやすい地域特性があります。

広域連携

市・JA・普及センターが連携して営農支援を行うなど、一体的な支援体制を拡充することで、就農定着率の向上が見込めます。

脅威 (Threats)

外部・ネガティブ要因

競合増加

亀岡オーガニック農業スクールや兵庫県農業大学校有機農業アカデミーなど、類似の有機農業研修施設との間で、受講生確保の競争が激化しています。

就農希望者減

全国的な農業の担い手不足や人口減少により、新規就農希望者自体の母数が減少傾向にあります。

有機農業の経営困難

有機 JAS 認証のコスト負担、慣行農産物との価格競争、市内市場の飽和感など、有機単独での経営安定化には構造的な厳しさがあります。

農地・住宅確保

優良な農地の不足や住宅確保の難しさなど、物理的なインフラ確保が就農の障壁となっています。

気候変動・コスト

資材・燃料等のコスト上昇や、猛暑・災害による収量不安定など、就農後の収支を圧迫する外部要因が深刻化しています。

全国認知の低さ

WEB 広報は一定の効果があるものの、全国の相談窓口や外部ポータルサイトでの認知が十分ではないとの指摘があります。